

## 学 位 論 文 の 要 旨

氏 名

熊 華 磊

学位論文題目

地域社会の視点から見た花見のリアリティ

—鹿児島県伊佐市大口の事例より—

本論文は、地域社会の視点に基づいて花見のリアリティを解明するために、鹿児島県伊佐市大口の花見を事例として論じたものである。

これまで、桜についての研究は数多くみられる。花見に関する知識のほとんどが桜の研究に内包されてきた。また、桜の研究のほとんどが、桜を中心に、桜と日本との関係を単純化された本質論で説明しようとするものである。しかし、あくまでも植物の一種である桜とその象徴するものに目を向けるよりも、桜に意味を付与してきた人間の営みに注目することが必要であると考え。そこで、そのもっとも重要な人間の営みが花見である。従来の花見研究は文献研究を主な手法としたものや、花見の一要素だけを捉えるものがほとんどである。つまり、現代日本社会における花見研究は方法論的に必ずしも十分に成熟しているとは言えない。そこで、本論文では、文化人類学的現地調査に基づいた事例研究という手法を導入し、伊佐市大口という地域社会における花見にまつわる多様な人間の営み、即ち多様な「花見の実践」を詳述し、この「花見の実践」をナショナル、ローカル、パーソナルといった重層的なコンテクストの中において解釈するという新たな花見研究のモデルを提示する。本論文を通して、花見のリアリティを解明し、花見がどのように現代日本社会における一般的な行事として成り立っているのかという問いに迫る。

本論文の構成は以下のとおりである。

第1章では、花見を研究テーマとして選んだ問題意識を説明し、本論文を通して何を明らかにするのかについて述べた。また、主要な研究方法であるフィールドワークについて紹介し、最後に、本論文の構成について説明した。

第2章では、桜や花見に関する先行研究を整理し、先行研究の中で特に重要とされるいくつかの研究を取りあげ、詳しく検討した。その上で、本論文の位置付けを明らかにし、本論文の研究方法を提示した。さらに鹿児島県伊佐市大口を調査地として選定した理由についても言及した。

第3章では、日本における花見文化の歴史的展開について、先行研究をもとに整理し、それを通して本論文の研究対象である現代日本社会における花見の立ち位置を明らかにした。また、花見の受容に関する研究の必要性についても指摘した。

第4章では、第3章での議論を踏まえ、花見が鹿児島県伊佐市大口で如何に受容され、

変容してきたかという問題に焦点をあてた。この問題については、従来、民俗学の分野で多くの研究がなされてきたので、本章では、民俗学における花見の研究を整理し、その現状と限界について指摘した。その上で、鹿児島県伊佐市大口における花見の受容に関する仮説を提示した。さらに、花見の受容後の変遷について、3つの集落の事例を通して考察し、地域住民による「花見の実践」が、地域社会における花見の多様な実態を生み出した要因であることを指摘した。

第5章では、第4章で指摘した「花見の実践」の重要性を踏まえ、その実例の1つである伊佐市大口にある忠元公園を取りあげ、忠元公園が花見の名所として展開してきたプロセスを初代忠元桜、2代目忠元桜、3代目忠元桜、そして、忠元公園の桜祭りの現状と変化に分けて詳述した。この記述を通して、忠元公園と伊佐市大口という地域社会との相互関係を解明し、地域社会における「花見の実践」が、重層的なコンテキストの相互関係の中で生み出されたことを指摘した。

第6章では、第5章の指摘を踏まえ、地域社会における「花見の実践」の原理についてより詳細に捉えるため、また、それを通して生みだされた地域社会における花見の持つ意味を明らかにするために、近隣の平出水中央集落と向江集落の花見の事例を取り上げた。平出水中央集落では、花見における変化という「花見の実践」に焦点を当て、変化の要因について解釈し、平出水中央集落の花見の意味を明らかにした。また、向江集落では、「花なき花見」の展開から「花ある花見」の創出へという一連の動きを記述した。最後に、平出水中央集落と向江集落における花見の事例を比較し、両集落における「花見の実践」の差異、即ち、地域社会における「花見の実践」の原理について考察した。

第7章では、伊佐市大口という地域社会における花見の事例を通して、現代日本社会における花見の存在の仕組み、即ち花見のリアリティについて考察し、それが一般性と多様性を同時に有する両義的な性格であることを確認した。花見の一般性について、従来の研究の多くはそれを桜に追い求めてきたが、桜を意識しない花見や桜が不在の花見の事例も存在するように、桜で花見の一般性を規定することはできない。そこで、本論文ではその桜の一般性を「娯楽」という概念で説明しようとして試みた。集落の事例では、花見と春先に元々あった民俗行事との重要度の逆転が見られるが、それは、かつて協働農作業をベースにした集落において、春先に元々あった民俗行事が強い規制力を持っていたのに対し、その後の農業社会の激しい変化に伴い、花見の一般性である娯楽がより多様な個人を集合させやすくなってきたからである。この考察を拡大すると、現代日本社会において、娯楽の行事としての花見は一種の結集の装置としての意味を持っていると言える。一方、花見の多様性、あるいは多様な実態を生み出したのは、各地域、集団、そして個人による多様な

「花見の実践」であると言える。さらに、こうした「花見の実践」は重層的コンテキストの相互関係の中で行われたので、花見のもつ意味は各地域、集団、或は個人によって異なったものとなる。本章の結論として、現代日本社会において、花見が一般的な行事として成り立っている原理はまさに花見のリアリティに由来し、それは、日本社会における多様な地域、集団、個人においてそれぞれに意味を持ちながら、地域、集団、個人間において、多様な意味が互いに干渉せず、「娯楽」という一般性に包括されているのだと言える。

第8章では、前章を総括し、結論としてまとめた。本論文の結論としては、従来の研究では、現代日本社会における花見についての理解が不十分であると指摘した上で、特定の地域社会ないし集団、或は個人による「花見の実践」を記述し、当該コンテキストにおいて解釈するという新たな花見研究のモデルを提示した。そして、鹿児島県伊佐市大口という地域社会において、忠元公園と集落の花見という形態の異なる2つの花見の事例を中心に上げ、上記の花見研究モデルに沿って分析した。それを通して、現代日本社会における花見の二面性というリアリティを明らかにした。それは、規制力が弱い代わりに包括性の強い「娯楽の一般性」と、重層的なコンテキストにおける「花見の実践」によって生み出された「意味及び実態の多様性」を同時に有する両義的な性格であると言える。